

グローバル化に 不可欠な 3つの要素

執行役員
サービス・産業ソリューション事業本部副本部長
肥後雄一



1980年代、学生だった私はボリス・ベッカー選手の強烈なサーブ・アンド・ボレーとステファン・エドバーグ選手の華麗なバックハンドに憧れた。テニスの話である。学生時代に始めた趣味のテニスは、今では週末だけの細々としたものだが、続けている。

テニス界は世代交替が進み、かなり恰幅がよくなったベッカー氏は、現在のナンバーワンプレイヤー、ノバク・ジョコビッチ選手のコーチを、今でもクールなエドバーグ氏は4大大会歴代最多優勝を誇るロジャー・フェデラー選手のコーチを、それぞれ務めている。ジョコビッチ選手対フェデラー選手のハイレベルな試合を見るのも楽しいが、今の私にとっての最高の楽しみは、日本のエース、錦織圭選手の世界での活躍である。

過去にも、日本人テニスプレーヤーの躍進はあった。ベッカー選手、エドバーグ選手と同時期に活躍した松岡修造選手が、ウィンブルドンでベスト8まで勝ち進んだ時の興奮は、今でも鮮明に覚えている。ただ、その時は日本人選手が世界のトップに立つことまではイメージできなかった。しかし、世界ランキングを最高4位まで上げた錦織選手には、その期待がある。

ところで、プロの解説者でもない私が論じることをご容赦いただきたいが、錦織選手の躍進には3つの要素があると思う。

1つ目は「独自性」である。体格が海外選手に劣る彼は、サービスで優位に立てない。しかし、ジャンプして打つ「エアークエイ」や、意表をついたドロップショットは彼の独自性であり、弱点を補って余りある。

次に、「パートナーシップ」である。素晴らしいポテンシャルを持ちながらも、伸び悩んでい

た彼をブレークスルーさせたのは、同じアジア系のプレーヤーであった現在のコーチ、マイケル・チャン氏との出会いであった。体格もプレースタイルも似ており、狙う方向が一致していたのであろう。チャン氏とのパートナーシップが、技術と共に錦織選手の精神面も成長させた。

最後に、「人材育成」の仕組みだ。世界でトップレベルを目指すテニス選手育成のために作られた「盛田正明テニス・ファンド」がそれである。彼はこのファンドを活用し、米国にテニス留学した。彼の活躍で一躍脚光を浴びたこのファンドは、今でも彼に続く若者にとって重要な人材育成基盤である。

話は変わるが、2015年10月に環太平洋経済連携協定（TPP）交渉が大筋で合意した。発効にはまだハードルはあるものの、今後、ヒト・モノ・カネの流通がグローバル規模で活発化することが予想される。日本企業のグローバル化が叫ばれて久しいが、TPPの時代には、これまで以上にその必要性が増していく。錦織選手活躍の3要素、独自性、パートナーシップ、人材育成は、日本企業のグローバル化においても重要である。

先日、某社の役員と会った際、「世界は2つに大別できる。日本かそれ以外かである」という話を伺った。それだけ日本という国は特殊であるという表現だが、これは、決して日本を蔑んだ表現ではない。むしろ、その「独自性」を評価した表現である。日本の独自性は「ガラパゴス環境」で育った独自の商品であり、高い品質であり、「おもてなし」文化でもある。私は、日本の独自性の潜在能力は高く、今後もその活用次第で大いに売れると思う。

企業における「パートナーシップ」とは、す

なわち他社との協業であり、M&Aである。日本企業による海外企業のM&Aは拡大しており、日本経済新聞（2015年8月24日朝刊）によれば、15年の金額は8月までの時点で7兆円を突破し、年間で過去最高だった12年の水準（7兆1375億円）を上回るのは確実である。日本企業がグローバル化の手段として、いかにM&Aを重視しているかの表れであろう。野村総合研究所（NRI）も2015年4月に、M&Aでブライアリー・アンド・パートナーズを仲間に迎え入れた。同社は米国のデジタルマーケティング・サービス提供事業者であり、そのサービスは今後の成長が期待できる分野である。このパートナーシップが、両社の新たな成長の起点になればと期待している。

しかしながら、M&Aなどによりさまざまな企業とパートナーシップを結んだとしても、「企業理念の共有」という仕事は残る。その共有なくして独自性もない。理念を実現するのは人材であり、人材が内向きではグローバル化は成立しない。私事で恐縮であるが、私は高校時代を海外で過ごした。海外では、自分の意思を持ち、表現することを非常に重視する。「君がしたいことは何だ？ それをアピールしなさい。私はそれを応援する」先生からよく掛けられた言葉だ。それは新鮮な体験であった。このようなことを個々人がOJTで学びながら、グローバル人材は育成されていくのであろう。

NRIは2015年度に創立50周年を迎え、22年度にグローバル事業売上高1000億円という目標を掲げた次期経営ビジョン、「Vision2022」を発表した。私もグローバル事業の成長に尽力していきたい。錦織選手が世界ナンバーワンになることを応援しつつ。
(ひごゆういち)